

サロン・あべの

<サロン・あべの>NO. 42

平成 元年12月 9日(土)発行



<サロン・あべの>の紹介をする冨田さん

あべのボランティア・ビューローからバスに乗って来られる人、長居の地下鉄を利用される人、タクシーに乗って来られる人、自転車や電動車椅子に乗って来られる人、歩いて来られる人等々が、黄金色に輝いている銀杏を見上げながら十一時の集合時間を前に続々と集って来られる。お顔なじみの人、初めてお目にかかる人等々に親しく笑顔が向けられ、賑やかな声が飛び交う。スポーツセンターの玄関で受付をして、自分の名札と班分け表を受取る。A班〜F班の六班に分かれている。スポーツセンターの体育館に全員が車座になり、オリエンテーションが始まる。

ふれあい交流会

サロン・あべの 十一月の出会い

風もなく、晩秋とは思えない小春日和りの平成元年十一月二十五日(土)午前十一時〜午後二時三十分、長居公園にある市立身体障害者スポーツセンターにおいて、阿倍野区ボランティアスクール受講生方と、老人福祉センターのデイケアを受けているご老人方、ビューロー関係の障害者とボラン

ティア方、あべのたんぼぼ作業所の仲間達、阿倍野区身体障害者協会の会員方との「ふれあい交流会」が阿倍野区社会福祉協議会、あべのボランティア・ビューローの主催で開催され、Aサロン・あべのVは十一月の出会いとして参加した。

今日のお世話をして下さったあべのボランティア・ビューロー、区役所、スポーツセンターの方々の挨拶を受けた後、グループ紹介に移った。あべのたんぼ作業所、サロン・あべの、あべのボランティニア・ビューロー関係。そして、アメリカの青年ボランティニア十六名の紹介と彼らのゲームが披露された。日本をよく知らない人に袋の中にある品物を見せて、その感想を言ってもらい、それを聞いた私達が袋の中の品物を当てていくゲーム。「泥のかたまりのよう」と言われたのは、お味噌のビニール袋入りであったりして、何点かの品物が用意されていた。おもいがけないゲームに初対面の緊張もほぐれ、笑いの内に各グループの紹介が終了した後、各班に集って、二階の研修室へ連れだつて行く。班分けのテーブルに各々が着いて、昼食とお菓子袋が配られる。各テーブルにボランティニアさん、障害者（車椅子使用者、視力）、アメリカの青年方がおられ交流の輪が広がる。

昼食後、スポーツセンター職員の森嶋氏の進行により、午後の交流会が始まった。

まず、各班でグループ名が付けられた。A班IIパンジー、B班IIえべっさん、C班

IIでこぼこ、D班IIくろごまのかつぞう、E班IIアスティンちゃん、F班IIおぼたりあんと、個性豊かな名前がついて各グループは一致団結、強いきずなで結ばれた。

正面に各グループの点取り表が張られ、第一のジャンケンゲームが開始された。

森嶋氏のジャンケンに班代表が勝てば、前に出てきて袋の中にあるカードを一枚手探りで取りだす。これを繰り返して、「天使・トナカイ・サンタクロース・くつした・クリスマスツリー」の五枚の絵を早く集めた班が勝となる。ジャンケンに負けたり、同じ絵ばかり取ったりして、なかなか勝負がつかず、意気込んだり、ガツカリしたりして笑いが満ちる。一位が六点、以下一点まで点数が配分される。

第二のゲームは、グループの人達と相談しながら、二五の枠組みが描かれた大きな紙に都道府県名と特産物名を書き込んでいく。出来上がったところで、森嶋氏が袋から県名を書いた紙を取りだし、その特産物を指名に当った班に答えてもらう。答と違う特産物が自分達の班に書いてあれば○、同じであれば×。○が縦、横、斜めと早く並んだ班が勝となるが、残念ながらその班



ゲームを楽しむ

は無く、○数の多い方から順位がついた。第三のゲームは、全員が参加する○×ゲームで、クイズの答を自分一人で判断して○と×との陣地に分かれていく。三問までの答で残った人の班名数で順位が決る。

三つのゲームの点数を合計して、一位から六位までの順位がついたところで、各班長さんに賞品が渡された。短い時間に全員が参加して、動いたり考えたり、笑ったり喜んだり、残念がったり、チームメートが一つになって充実した半日を過ごした。

この日の参加は、百余人。サロン・あべのからは二三人が参加した。



おしらせ

ハサロン・あべのV

一月の出会い

日時 平成二年一月二〇日(土)

午後一時〜三時

場所 『乞う！ご期待』

内容 『出会い 楽しい 新年会』

会費 二〇〇円

申込み 一月十五日までに

TEL・06-691-1028

(富田慶子)

「え きー」

中野 君江

知らない町の、初めての駅におりたつ。十四、五人階段をさっさと上って行く。

「あーア、この駅も又階段」。平地なのに昇り階段と言う事は、又下り階段が……と思うと一度に疲れが出る。手摺のお世話になり一段一段上って行く。砂埃りのついている時や、心ない人の仕業で裏側面にガムがべっとりすりつけていることも。だけど、見た目に見えない所なので誰も気がつかない。ガツカリ。手摺の型も色々あって、普通一般に多い丸型はいゝとしても、角型は少し大き過ぎるし、取り付け位置も高いの低いのまちまち、何を基準にしておられるのかしら。

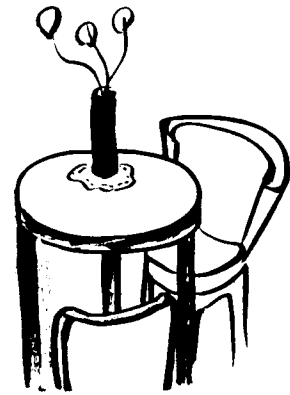
私は左側でないと階段上ったり下りたり出来ないで、右側通行の人とぶつかりそうになり「ごめんなさい」と何時も挨拶する。切符を渡して階段を下る。急な階段なので体がこわがって一歩も進まない。踊り場までやっとの思いで下りたが、サア大変今度は縦さくわくの階段、下を見ると自転

車がいっぱい。何だか吸い込まれそう「助けて」じっと立ちすくむ。初めて降りた駅なのでどんな構造になっているのかも知らないものだから、下りるにこわいし、ものにもどられず、どなたか介添えの人の助けを待つしかない。次の電車が来た様子、



若い人をお願いするのも悪いし、中年の女性の方が見え、やっとお願いで手をつないで下していただく。やれやれよかった。あれ以来、改札口で駅員の方にお世話になっていきます。これからも毎週下車しますので介助方よろしくお願ひします。

美智子のこんな話



岸田 美智子

美智子の飛行機初体験

十一月三、四日の一泊二日の予定で、北海道に出来たケア付き住宅を大阪市障害者福祉課と共に作っている、ケア付き住宅研究会のメンバーで行った調査研究旅行に参加しました。

私は、北海道も初めてなら飛行機に乗るのも初体験なのでした。まず、飛行場まで何事もなくていけるかなあ？と心配しました。空港バスは段が高いし通路も狭いので、私の場合車椅子から降りて上半身と足を二人で抱き上げてもらわないと乗れません。だから、時間もかかるので、きつといやな

顔されたり何か文句をいわれたりするだろうと思っていました。バス停ではちょうどこの日から連休なので臨時便も増発されてはいましたが、かなり長い列が出来ていました。そんな中、並んで待っていると、バスが来て突然係員がマイクで「車椅子の人の前に来てください」と、前に呼び出され介助も手伝ってくれ、一番先に前の席に落ち着く事ができたのでした。車椅子も大型荷物置き場にのせてくれ、難無く楽々と空港へ着く事が出来ました。

空港で私は機内用の車椅子にのりかえましたが、これはとても座席が高く座席が小さく障害者には座りにくいものでした。それに、後ろには大きいタイヤと普通の車椅子の前に付いている小さいキャスターと同じ物との両方が付いていて、なぜかなあ？と思いました。これには訳があったのでした。機内に乗りこむ時職員が手際よくひじおきを背中の方へたたんで、大きなタイヤを両方同時にパッとはずしてしまっただけです。こうすると、狭い機内でもこの車椅子で座席の所まで行けるのでした。座席の高さもピッタリ合うのです。なるほどこうなっていたのかと思いました。

無事機内の窓際に、一般客より先に（車

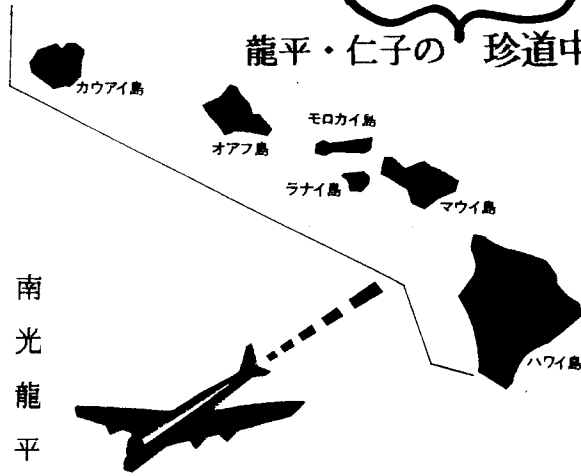
椅子の人は出発時間の一時間前に空港へ行くのでした）案内されて乗り込みました。そして、私達のこの571便が、二〇分遅れでやっと滑走路を動き出し、その離陸の瞬間は、やはり、胸がドキドキし、感動してしまいました。私は子供のように、その一時間四〇分の間、北海道の千歳空港に着くまで窓から見える景色に見入っていました。

天候に恵まれていたので、雲は綿菓子そっくりだし、山間部はまるで板チョコみたいでした。富士山が雲海からほんとうにポツカリと頭をだしていたし、下北半島が当り前の事なのに、地図で見るとそっくりの形にクッキリと見えたりして、その風景に感動していました。そして、その風景はまるで蟻がはうように、ゆっくりゆっくりと窓の外を流れて行くのが不思議でした。翌日の帰りは夜だったので、その夜景がまた奇麗でした。おもわず、なぜ？か、私が生きている事、人間が生きている世界が小さいなあと、フツと思っていました。

今までなんとなく、恐がっていたのか何だか分かりませんが、飛行機に乗らなかつた私でしたが、今度は外国へでも行こうかなあ、なんて思っている私でした。

ハワイ

中道珍の仁子の平龍



南光龍平

汗をかきかき値切る

ホノルル到着は定刻。飛行機の旅がはじめてだった他のご夫婦も何事もなく、無事ハワイの土を踏むことが出来た。

しかし、ここでもまた待ちぼうけを喰う

ことになる。

空港まで迎えに来てくれるはずのハンディキャブがなかなか来ないのだ。結局我々の飛行機の到着時刻が変わったことが、現地旅行社を通じて、ハンディキャブの会社にうまく届いていなかったらしい。一時間待ち、やっとハンディキャブに巡り会えた。(ついでながらこのハンディキャブというのは、日本のリフト付き車椅子タクシーと同じようなものなのだが、日本の場合、大阪のような大都市に一台ぐらいしかなく利用する時はかなり前からの予約が必要。それに対してハワイの場合だとホノルルのあるオアフ島全体だけでも十台近くあるという。おまけにいろいろな車種や大きさがあるようで、この会社はハンディキャブの仕事だけで採算が取れているとのこと。やはりそれだけ需要が多くあり、障害者が街の中へごく普通に出ている証拠。ニワトリとタマゴではないが、街の構造が初めから障害者にむいているのか、それとも積極的に障害者が街へ出掛けていった結果なのか、とにかくホノルルで本当に多くの車椅子の人達に出会う度に羨ましく思うことしきり

さて、やっこのことでハンディキャブに乗り込み先ずはホテルへ。チェックインで

きる時間にはまだ早いのだが、とりあえず荷物だけをおろし身軽になってホノルルの市内観光へという訳だ。

最初の目的地はフリーマーケット。日曜日や祝日に開かれている青空市。いろいろな所で行なわれているそうだが、我々が訪れたのは、野球場の駐車場などを利用して開かれているもので、売っている物はアロハ、ムームー、Tシャツ、スポーツタオル、果物などなど。あらかじめ添乗員から「言い値で買ってはダメ。値引きしてもらうまでの掛け引きもショッピングの楽しみの一つ。」と聞いていたので、何を買うにしても片言の英語と身振り手振りで値引き交渉。必死になって、汗をかきかき思い思いのものを買い回った。

そのあと、ハンディキャブで市内の主だったところを巡り、ホテルへ戻ったのはお昼をかなり過ぎていた。(つづく)



旭 純 子



ろうあ者福祉行政・施策上の課題一

ろうあ者は様々な要求運動の展開により、「ろうあ者施策」の必要性を訴え、復権の歴史を歩んできた。しかし、現行制度は多くの問題点を含み、ろうあ者のニーズを充足し、十分な生活保障をするには至っていないということ。これまで指摘されてきた通りである。「福祉切捨て」の行政下では現行制度の改革要求と同時に、従来の施策

が改悪されることのないよう、守るという姿勢も必要とされよう。

では、つぎに具体的にどのような施策充実のための課題があるのか、上げてみたい。

- (一) 文字放送の全国放送早期実現
- (二) 日常生活用具の充実
- (三) ミニファックスの基本料金撤廃
- (四) ろうあ者の雇用拡大
- (五) 国の委託事業の内容の再検討
- (六) ろう学校における手話指導の必要性
- (七) 身体障害者福祉法改正後の聴言障害等級（一級格上げ）認定基準の画一化

このほかにも様々な課題が山積しているが施策上の問題点を十分把握した上での充実が望まれる。

「日本型福祉社会」の構築は、在宅ケアの重視、受給者の一部負担、という形をとって「国民の自助努力」を重視する方向へと進んでいる。たとえば、大阪においても「地域福祉の推進」の名のもとに「社会参加促進事業」「手話通訳関係事業」の大部分を奉仕員事業として、コミュニケーション内のボランティア活動の振興にすり替え、通訳の設

置を最小限にとどめようとする考えが、対府交渉（昭和六十一年八月）時に出生されている。これは、「手話通訳制度化運動」とは逆行する方向であると思われる。「制度化」を確立するためには、「ボランティアであってはならない理由」の明確化、「手話通訳関連従事者の専門性」理論を確固たるものにする必要があると思う。



∞ サロン・あべの紙の

朗読テープが出来ました ∞

「阿倍野区ボランティア連絡協議会」の朗読グループのご協力により、サロン・あべの紙の録音テープを作っていたいただきます。

サロン紙切読テープご希望の方は、富田までお申し出下さい。（TEL 06-691-1028）

あれは九月の末ごろでした。自動車から降りて、トランクの中の車椅子を出そうと左足を踏ん張った瞬間、その左足に電気が走ったのです。その日はそれだけだったのですが、それから四日目ごろから、だんだん左足が痛くなってきたのです。

それから一週間というもの、痛くて痛くて、一番ひどいときには、部屋から出られなくなり、仕事にも行けませんでした。もちろん病院にも行けませんし、夜も眠れませんでした。足に力を入れなければ痛くないのですが、脳性麻痺特有の緊張があるので、勝手に力が入ってしまい、そのたびに飛び上がっていました。

電気が走る数日前から、急に気温が下がってきたので、足の筋肉が萎縮していたのでしょう。そこへ足を踏ん張ったときのショックで、神経に傷が付いたのだと思います。

ひどい痛みは一週間程でなくなりましたが、二ヶ月以上も経った今でも、少し足を冷すとしびれたような痛みがあります。

今わたしが住んでいるのは、マンションの二階です。でも、入り口のところに

は段差が二つ。エレベーターなんてありませんから、下に車椅子を置いて、階段を昇っています。ここに住んで、もうすぐ丸三年になるのですが、段差があることと、エレベーターがないということを除けば、なかなか良いところだと思っていました。

『痛っー！』 上平 幸雄

ところが、今回足を痛めて、階段の昇り降りができなくなってきて、エレベーターの必要性をつくづく感じてしまいました。

わたしの場合、両手がまあまあ普通に使えて、なんとか伝い歩きができる、という体の状態を前提にして、現在の生活

が成り立っているのです。今回のように足が痛くなれば、外に出ることすらできなくなってしまうます。

元々、足に障害があるので、なにかあると、すぐに生活のバランスが崩れてしまうのです。しかし、このようなことは障害者に限らず、誰にでも起こり得ることではないでしょうか。健康でけがなんているのです。

けがや病気をしないように、普段から気を付けるのはもちろんですが、今の生活環境を見直してみることも必要ではないでしょうか。

ちょっとした段差や、階段、和式のトイレ、深い風呂等。今は困っていませんが、もしかすると困るかもしれないことが、いたるところにあるものですよ。

追伸

家を探しています。子供の保育所(阪南第一保育所)から遠くなく、段差がなく、エレベーターがあり、3DKくらいの広さ。近くに駐車場があつて、家賃も安い。そんなところはないでしょうか。ないでしょうね。

はじめての親友

ぼくには、自分の人生の境目、境目に思ひ出す少年がいる。

彼はいつまでも少年のままだ。彼が小学四年生のときの姿しか、ぼくには思い浮かばない。

彼は、ぼくにとつての初めての「親友」である。人には「初恋の人」がいるように「初めての親友」もいるのではないだろうか。それまでは無自覚に誰とでも気があえば遊んでいたのが、十歳前後になつて孤独を自覚しはじめ、秘密を打ち明けたり、何かを共有したりする特別な友だちがほしくなるものだと思う。

彼はぼくよりもほんの少し小柄で、どことなく子鹿を思い出させるような澄んだ目をしていた。その目の片方のななめ上、こめかみのあたりに少し大きなホクロがあつた。全体として整つた顔立ちであつたが、なんだかとぼけた雰囲気をもつていた。

九州の炭鉱に勤めていた父親が転職してこちらに來たばかりで、九州なまりの言葉が素朴な性格を語つていた。新しい土地に來たばかりでなじめなかつた彼の姿に、ぼくは初めての親友になるべき少年を認めたのだから。

彼とのつきあいは一年だけだつた。たぶん再び転校したのだから。どうやつて別れの言葉を言ったのかも覚えていない。

彼のその後を知つたのは、ぼくが大学に入つて二年目のことだつたと思う。まつたくの偶然に、ある人から聞いたのである。彼は、中学生になつたころ、自転車通学の途中、トラックにはねられたらしい。即死だつたそうだ。

ぼくは驚いたが、悲しいという気持ちよりも不思議な気持ちだつた。彼の死を何年間も知らなかつたことが、ぼくから現実感を奪つてしまつたのだから。

それ以来、なにか自分にあるたびに彼のことを思い出す。

就職がきまつて嬉しかつたとき、結婚したとき、自分の本が出版されたとき、あるいは何か悲しいことが起こつたとき、つらいとき、そのほか、なんでもないとき、例えば、仕事を夜遅くまでしたあと夜道を急ぐとき、雑踏のなかで友達と待ち合わせをしているとき、ひとりで食事をしているとき、ふと、彼の不思議そうに口をとんがらせている顔や、眉の上にきれいにそろえた前髪や、相撲をしたときの彼の細い骨の感覚などが、ぼくの身体のなかに蘇（よみがえ）つてくるのである。

彼はなぜ死に、ぼくはなぜ生きているのだから。彼は、青春の悩みも、女性の温かい抱擁も、残業のあとの軽やかな夜道の散歩も知らずに、この世から消えてしまつた

のである。

小学生のころ、おそらく多くの小さな「親友どうし」がそうであつたように、ぼくもまた彼を自分の「分身」のように思つていた。まだ霧に覆われていたような淡い自意識のなかで、「兄弟」よりももつと強い、なにか精神的な双生児のようなつながりを彼に感じていた。

ぼくは、毎日こうやつていろいろなことを感じながら、体験し、出会い、仕事をしていく。しかし、彼は、ほんとうに若くして死んでしまつて、そのために多くのことを感じ、体験することができなかつた。それで良かったのだろうか。あまりにも不公平ではないだろうか。

ぼくは、自分がなぜ生きているのだろうかと考えるとき、同時に、なぜ生き残つているのだろうかと思う。彼は死んだのに、なぜ自分は生きているのか。運がいいだけなのか。

彼の分まで生きようと思つたこともあつたが、そんなことが死んでしまつた彼にとつて何か意味があるのだろうか。

嬉しく思うのは、ぼくの前に彼の姿が浮かぶとき、彼はもうずいぶん年をとつたぼくの方を見て、羨むような、妬ましいような目を決してしないのである。不思議なことだが、小学四年生のときのそのままの笑顔で、少し驚いた子鹿のようなとぼけた目をして、「どうして？」とでも言いたげに首を傾げているのだ。

(知)

第十話

「コープ住宅」の話

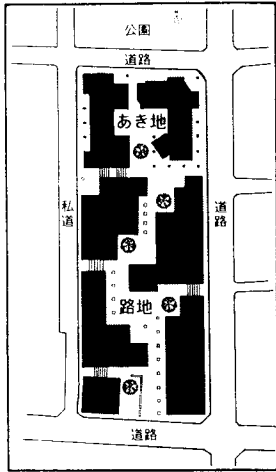
「コープ住宅」といつても生協で住宅を売っているわけではありません。

もう少しきちんと言うと「コーポラティブ住宅」といって、何人かの人が希望やアイデアを出しながら共同で家を建てることなんです。あべのでも阪南町の方で二年前からいいのができて、新聞にも出たから知ってる方もいるでしょう。

あべのには、古い長屋がたくさん残っていて、落ち着きたい町並みだと思わんです。とはいえ、狭かったり、不便だったり、若い人が住み続けようと思ったら、やっぱり新しいところも必要です。

でも、ひとりひとりが一戸建ての家を建てていくと、まさか鉛筆みたいなおぼろの家を建てるわけにもいかないから、ちよつと遊んだりできるような空地なんて無理だ

し、見た目にもバラバラになっちゃうんですね。(ひとつずつは格好いいんだけど) それを何とかしようと思うと、長屋のみんなとか、ご近所とかで話し合っで共同で建て替えるというのが、とてもいい方法ということになりますね。しかも話合いながらやっていくから、家の都合に合った間取りなんかもとれるし、ひとりひとり建てるよりもゆつたりとした家もできそうです。とりあえず私には縁がありませんが、建て替えるを考えているあなた、ちよつと考えてみられてはいかがですか？



なんとか
してらな

天下御免と走っていいのかな？

電動車で歩道を走っていると、目先がきかなくてUターンをしなければならぬはめになります。広い歩道ではめったに無いことですが、庚申街道やちよつとした普通の通りの幅の狭い歩道では、かならずと言ってよい程に乗用車の片足駐車がされていきます。また、自転車の歩道垂直(直角)駐輪も。これらは、遠目に見ただけではその歩道の空き幅がよく解りません。近くまで行って初めて、車イスの幅で通り抜けられないことを知ります。Uターン出来る広さが気がついた手前であれば、まだ助かりますが、看板が出ていたり、ゴミ箱が置かれて有ったりしますとUターンも出来ず、そろそろと後ろも見えないで(首がまわらないので)バックをしなければなりません。

編集後記

インクのおいが残る真新しいくサロン・あべの>紙を、ふれあい交流会参加のみなさんに配った。

なかに、サロン・あべのの前例会で、自然史博物館へごいっしょしたアメリカのひとたちの仲間の顔もあった。そのひとり、手渡されたくサロン・あべの>紙をめくっていて、『こんな出会いもありました』の写真に目が止まり、記事を読みだした。このひとたちの会話力はいうに及ばず、ひらがなの50音、山・川などちょっとした漢字も読めるという。読みながら隣の人と談笑している。

<サロン・あべの>紙が仲立となって、ふれあいの輪がひろがっていくのを見て、サロン・あべのは鼻タカダカ〜。(石)



<サロン・あべの>第42号

発行日 平成 元年12月 9日(土)

発行・編集くサロン・あべの>運営委員会

[大阪市阿倍野区阪南町6-3-26

電話(06)691-1028富田慶子]

印刷 セルフ社 電話(06)691-2365

[阿倍野区西田辺2-2-10

グレース鶴ヶ丘101号]

定価 ¥62.

ん。そして、Uターン。切られた歩道(車イスが走行できるように段差をなくしてあるところ)から車道へ出て駐車場の横から行き先をのぞき見して、後は天下御免と車道を走るのみです。

今、自動車の駐車問題がやかましく言われていますが、この片足駐車もなんとかしてほしいものです。

(T)



国障年大阪連続セミナー



第5回 『社会的自立をめざす総合計画』

— 90年代の運動と政策を考える —

とき; 12月17日(日)

午前10時~午後5時

ところ; 部落開放センター6階ホール

参加費; 1000円

プログラム;

★基調提起(午前10時~11時)

★基調に対する質疑応答・意見交換

(午前11時~12時)

★分科会(午後1時~5時)

問い合わせ; 大阪障害者情報センター

TEL. 06-607-8260.